

〈資料紹介〉「壬生地蔵縁起絵巻」注釈（二）

八 木 智 生

「壬生地蔵縁起絵巻」は、壬生寺（京都市中京区、律宗、本尊は延命地藏尊）に所蔵されている。本文はすでに、元興寺仏教民俗資料研究所編『壬生寺民俗資料緊急調査報告書 第三分冊』（壬生寺、一九七五年）に翻刻されているが、いくつかの誤りが認められる。そこで、あらためて原本を参照して翻刻と注釈を行うことにした。本稿では、第二巻第一話と第三巻第二話を対象とする。

【凡例】

- 一、底本には、原本を用いた。
- 二、本注釈は、本文、語注、補注からなる。
- 三、本文は、底本を翻刻し、基本的にその通り表記した。ただし、通読の便宜のため、適宜次の操作を行った。
 - ・任意の改行をほどこし、各段落の先頭は一字下げた。

- ・旧字、異体字は通行の字体に改めた。
 - ・底本の細字、割注は「（ ）」で示した。
 - ・句読点、濁点を補った。
 - ・明らかに錯簡と思われる部分には、〈錯簡〉と表記した。
 - ・絵は〈絵〉と示した。
 - ・貼紙は〈貼紙〉と記し、内容を枠内に示した。
- 四、語注には、本文中に「*」を付した語句について、それぞれ記述した。難解な語句や固有名詞などを解説している。
 - 五、補注では、語注では解説しきれなかった、主にその段全体にかかわる問題について、さらに考察を加えている。
 - 六、各話の最後に、版本『壬生寺縁起』（元禄十五年序）の該当話を記した。なお、版本の説話標題は版本巻頭の目録による。
 - 七、注釈にあたって、多くの文献・論文・辞書から教示を得たが、

紙幅の都合上省略した。

第二卷

一 当寺行幸事 白川鳥羽両院

【本文】

*寛弘年中に御堂の供養成立してより以来、本尊の靈験季をかさねていよ／＼あらたに、日を逐てます／＼たうとく侍りき。たのみをかくる者、*世出世ともに*冥顯の益にあづからざるはなし。ことに地藏菩薩は*天下の動乱をしづめたまふ事あり。その*形像を見るに、*不動・*毘沙門のごとく、いぶかしき*降伏の粧もなし。只*柔和忍辱にして*声聞の形を現じ、身には袈裟をかけ、手には錫杖を持って御*質をたのみとするにおよばじといへども、地藏尊は外には*接受の形をあらはし、内には*折伏のいきおひをかくし給へり。されば極めて*忿怒おそろしき*四面八臂の*軍荼利明王なり。*大日経の

〈錯簡〉

又*定業の病を受けて万死一生なりとも、地藏を念せば*病即消滅、不老不死ならん。*又飢饉の年にあたりて彼周の代のごとく九年の*炎旱にやけ、九*季の*霖雨に朽とも、炎旱の天俄に*鬘鬘垂布し

〔資料紹介〕「壬生地蔵縁起絵巻」注釈(二)

て、甘雨飽まで降して五穀ゆたかに成ぜむ。又霖雨の空も忽に雲はれて、青天に日照て百葉茂く結ばん。誠にこれありがたき経の*真文なり。

是によりて一天の君王、殊に当寺の本尊御崇敬他にことなる者哉。爰一条院御宇正暦二年より八十余歳を経て、白河院*睿情を凝して靈夢を感じ、この尊をさして*生身と称せり。たちまちに*后宮をうつして、*承暦年中、仏間に詣し、たち所に*道儀をます。則寺号を地藏院と定らる。しかのみならず、鳥羽院御帰依あるに依て、*天承年中に又一日御幸の儀あり。既に*龍顏聖主二代尊崇の所、一寺の*粉沢これにあり。*万代の*眉目かぎりなき者也。爾よりこのかた年々*輪転の四序*二百余歳、日夜往詣の諸衆千万人、所願成就、如意円満うたがひなし。

〈絵〉

【語注】

寛弘年中 一〇〇四〜一〇二一。

世出世 世間出世間の略。俗世間と俗世間を捨てた出家の世界。また、在家と出家。

冥顯 死後と現世。また、見聞きできるものとできないもの。

天下の動乱をしづめたまふ 『延命地藏菩薩経』、『地藏菩薩本願経』

には、これに該当するような利益は見あたらない。ただし、勝軍地藏の利益は、戦いに勝ち宿業・飢饉などをまぬがれるというものであり、これに該当するか。

形像 姿かたち。また、仏などの姿・形をかたどった絵や彫刻。

不動 不動明王。密教でいう五大明王・八大明王の主尊。大日如来が悪魔・煩惱を降伏させるために化現した教令輪身。忿怒の相をと

り、右手に降魔の剣を、左手に捕縛の羂索を持ち、火炎を背負う。

毘沙門 毘沙門天。四天王・十二天の一。仏法を守護し、福德を授

ける。忿怒の相を表し、甲冑を着け、片手に宝塔、片手に宝棒また戟を持つ。

降伏 神仏の法力で、悪魔や敵を防ぎ抑えること。

柔和忍辱 仏の教えを心とし、柔順温和で、外からの恥辱や危害によくたえ忍ぶこと。心優しく、怒らないこと。

声聞の形 良い修行者の姿。「声聞」は、仏の説法の声を聞いて悟る弟子。

質 事物の成立するもと。物の本体。また、姿、形。からだ。

接受 「折伏」の対語。仏道を成就させる方法として、寛大な心で、他を受け入れること。衆生の善を受け入れ、収めとって導くこと。

折伏 「接受」の対語。相手の悪を指摘し屈伏させて正信に導き入れる教化の方法。

忿怒 はげしい怒り。「忿怒の相」は、はげしく怒るさま。怒りの形相。

四面八臂 四つの顔と八つの肘。

軍荼利明王 密教でいう五大明王の一。宝生如来の教令輪身。煩惱や障害を取り除くという。忿怒の相を表し、四面四臂や一面八臂の形像である。

大日経 『大毘盧遮那成佛神変加持経』。真言三部経の一。密教の根本経典の一つ。

定業の病 前世の業によって定まっている難病。

病即消滅、不老不死 『法華経』薬王菩薩本事品第二十三に、「若人有病 得聞是經病即消滅 不老不死」とある。病気が治るといふ地藏尊の利益は、『延命地藏菩薩経』「十種福」にある「衆病悉除」および『地藏菩薩本願経』「二十八種利益」にある「疾疫不臨」に相当する。

又飢饉の年にあたりて〜百菓茂く結ばん 干ばつや長雨が収まり、五穀豊穰になるといふ地藏尊の利益は、『延命地藏菩薩経』「十種福」にある「風雨隨時」・「穀米成熟」に相当する。なお、中国周代に干ばつや長雨があつたということについては不詳。あるいは春秋戦国時代のことを指すか。

炎旱 日照り。炎暑の干ばつ。

季 季節、あるいは一年。

霖雨 何日も降りつづく雨。ながあめ。

鬘垂布 「鬘鬘」は雲や霞がたなびいている様。「垂布」は一面に垂れていること。『法華経』葉草喻品第五に、「鬘鬘垂布 如可承攬 其雨普等 四方俱下」とある。

真文 仏・菩薩の説いた文句。また、梵字で書かれた経文。

睿情 天子のお気持。また、お情け。

生身 生きていような、姿そのままの仏像。生き身の姿を写した像。仏・菩薩がかりにこの世に現れた化身。その化身の仏。

后宮 皇后が住んでいる御殿。皇后の御所。後宮。

承暦年中 一〇七七〜一〇八一。

道儀 仏道修行の行儀。仏道修行の立ち居振舞いや作法。白河院は仏教に深く帰依したことが知られている。

天承年中 一一三一〜一一三二。

龍顔 天子の顔の敬称。天皇のお顔。

粉沢 装飾。

万代 永久。いつまでも。

眉目 ほまれ。面目。名誉。

輪転の四序 「輪転」は順番にぐるぐる廻ること。「四序」は四季のこと。四季がめぐる、一年のことをいう。

〔資料紹介〕「壬生地蔵縁起絵巻」注釈 (二)

二百余歳 「天承年中」から縁起が撰述された時点まで「二百余年の月日があることを示している。つまり、この記述を素直に受け取るならば、「壬生地蔵縁起絵巻」本文の成立は十五世紀中期となるであろう。

(版本・上巻第三話「当寺行幸の事」)

一 当寺本尊開帳事 天養元年六月十七日

【本文】

正暦二年の草創より以降、本尊の御*厨子に*御帳をかけ奉て、*左右なく凡人の肉眼に薩埵の御身を拝する事を制し給へり。その故は、尊容を見奉るといへども、*不信懈怠の者は忽に*現罰をかうぶり、又信心*渴仰の人は、たゞちに巨益にあづかる事、いく千万といふ数をしらず。是ひとへに賞罰嚴重の*得失を恐る、故也。

こ、に近衛院御宇*天養元年六月十七日丑時に本尊の開帳あり。

その*濫觴を申すに、後白河院の長子人王七十八代二条院〔御諱守仁、御母贈皇太后懿子、贈太政大臣経実公御女也〕御降誕の御祈のために御立願あり。則御産平安、皇子御誕生ましましけり。夫*地藏経の文にかなへり。則*万里小路中納言を行事の勅使として、執行*中観法印〔生年八十九歳云々〕勅宣をうけたまわり、開帳の儀式をいたし奉る〔六月十七日より同廿四日に至て一七ヶ日開帳

云々)。仙院〔貼紙〕**鳥羽・崇徳両院坎**。一日の臨幸ありて、睿情まことを疑しをはしますれば、比*掲焉也〔この開帳の事、*鎮定記に見〕。

然則、道俗貴賤雲のごとくあつまりて尊像を拜、都鄙の結縁は星のごとく連りて*瞻仰をなす。

其中に男一人あり。先世の*悪業や催しけむ、身に*悪病をうけて、おそろしくなりぬ。是*大乘誹謗の果報なれば、今生のみにあらず、来世も悪道に落すらむとて歎かなしみて思ひけるは、いま五条坊門の地藏菩薩の開帳の砌なれば、参て祈申べし。此ぼさつは慈悲ふかくして叶ひがたき愁をも助給なれば、坊城の辻なる石仏の堂より泣く*百度まいりをぞし侍る。只一すちに此病患を祈申に、程なく病なをりて尋常の人よりも*息災に成にけり。これより*百度まふでは石仏よりするに即時効験ありとぞ申つたへ侍る。

【語注】

厨子 仏像・舍利・経卷などを納置するもの。一般に正面に両開きの扉をつける。

御帳 戸帳。神仏の厨子の上などに垂れる小さな帳。大阪歴史博物館蔵『洛西壬生寺畧縁記』(芸1032)、成立年不詳、近世中期頃か)

では、「此本尊御厨子に掛りし御戸帳は、先蹤を追せられ、開帳の

みぎりには度毎に禁裏御所より御寄附にて掛替奉り、いまに恒式となり、御代参等つねに至り有らせられ、ますます本尊の霊徳をそへ奉る。〔句読点は稿者による〕と、開帳のたびに禁裏御所から戸帳が寄付されたという。また、壬生寺には弘化五年(一八四八)の即位開帳の際禁裏御所より奉納された戸帳が現存する。この習慣がいつからのものなのかは不明。

左右なく 無造作に。かたんに。

不信懈怠 心に仏道を信じ清らかに願望望む心がなく、修行をおこたること。

現罰 現世で身に受ける罰。

渴仰 仏を深く信じ仰ぐこと。

得失 得ることと失うこと。また、成功と失敗。

天養元年 一一四四。

濫觴 物事の起り。始め。起源。

地藏経の文 『延命地藏菩薩経』「十種福」の第一に「女人泰産」が挙げられている。

万里小路中納言 万里小路家は、資通(一二二五―一三〇六)を家

祖とする。天養元年には、その四代前である藤原光房(一一〇九―一一五四)がいるが、中納言には任官されていない。

中観 不詳。

掲焉 著しいさま。目立つさま。

鎮定記 不詳。

瞻仰 あおぎみること。見上げること。あおぎ尊ぶこと。敬い慕うこと。

悪業 苦果を招く原因となる、身・口・意による悪い行為。また、前世の悪事。転じて、前世で犯した悪事の報い。

悪病 たちの悪い病気。

大乘誹謗の果報 「大乘」は大乗仏教の經典。特に『法華經』のこと。「誹謗」は悪く言うこと。そしること。「果報」は前世での善悪

さまざまの所為が原因となつて、現世でその結果として受けるさまざまな報い。『法華經』譬喻品第三には、「若人不信 毀謗此經 則

斷一切 世間佛種 或復墮蹙 而懷疑惑 汝當聽說 此人罪報 若佛在世 若滅度後 其有誹謗 如斯經典 見有讚誦 書持經者 輕

賤憎嫉 而懷結恨 此人罪報 汝今復聽」として『法華經』を誹謗する者への悪果が説かれるが、その中に、「若得為人 聾盲瘡痂

貧窮諸衰 以自莊嚴 水腫乾疔 疥癩癰疽 如是等病 以爲衣服」と病を受けることが述べられている。『法華經』を誹謗した者は、

業病を蒙るとされるが、これは多く癩病であるとされる。『法華經』普賢菩薩觀發品第二十八には、「若復見受持是經者 出其過惡 若

實若不實 此人現世得白癩病」とある。本話では何の病気が明示さ

れていないが、「おそろしくなりぬ」という記述や、大乘の誹謗と

いった悪因から考えて、同じく癩病と考えられる。版本『壬生寺縁起』の当該箇所では、「ある男の宿業にや有けん癩病を煩ひて」、

「かゝる病は宿世に大乘の御法を誹謗せし果報ときけば」とする。

「かゝる病は宿世に大乘の御法を誹謗せし果報ときけば」とする。境内の一定の距離を百度往復してその都度礼拝し、願い事がかなうよう祈願すること。

息災 病気をしないで、元気なこと。また、仏の力で災難を防ぎ止めること。

百度まふでは石仏よりする 百度参りの際、境内の百度石によつて回数数を数えることと関連するか。

（版本…上巻第四話「本尊開帳の事」・中巻第五話「当寺本尊に祈悪病平愈付百日詣の事」）

一 東国飯飼平次事

【本文】

* 治承の比なるに、東国の*飯飼の平次といふ物、いかなる過のありけるやらむ、*六波羅へめしのはせられて、相伝の*所帯なんども皆たがふべきになる。

平次この由をき、て、あさみ歎事云ばかりなし。いまは仏神の御

たすけならでは*安堵すべきにあらず。五条坊門の地藏菩薩こそ、実を至ばかならずしるし有なれと聞て、霜月ばかりの事にや、雪のふかく降つみてありけるに、徒跣にて泣く／＼三ヶ日の間に百度まいりをぞしける。御前の*廊に*敷皮をしきて、参たびごとに三度拜て*敷を敷皮の上のをきて本尊をぞ*周匝奉る。

さる程に*結願してやすみ伏てある夜の夢に、わかき僧の止事なきが、何よりもおほえず仰らるゝやうは、やゝいたくなげきそ。御はからひあらむずるとみて、うちおどろき身の毛いよだち心さわぎ、いかなる事のあらんずるにやと思ふ程に、六波羅よりことゆへなく御ゆるしを蒙て、元のごとく本国へ下べきになるに、先此寺へまいりて偏にこれ薩埵の御助也と首を地につけて悦申す。まことに見聞の人々信を凝さずといふ事なし。

さて国へ下て後、としごとくに人夫を出したて、*仏餉用途をまいらせける事懈怠なかりけれども、猶思ひけるは一期こそかやうにまいらす共、子孫の世にはかなはじとて、京へのぼりて西九条に田地を買て、永代の*仏供田にまいらせをけり。当時*夏衆の供米になれり。しかれども、*上分をかならず仏餉に備へきたるはこのゆへ也。それ利生のはやきをそきは、たゞ信心のふかくあさきによるべきにや。

【語釈】

治承の比 一一七七―一一八一。

飯飼の平次 不詳。以降の記述から、武士であることがわかる。

六波羅 六波羅探題の略。鎌倉幕府が京都の六波羅に置いた機関で、洛中の警護や朝廷との交渉、西国の政務や裁判を職務とした。しかし、六波羅探題設置は承久三年（一二二二）の承久の乱以後であり、

治承年間にはまだ存在していないはずである。また、六波羅探題の管轄区域は西国であつて、なぜ東国の平次が裁かれているのかは疑問。西国に所領を持っていたということであろうか。

所帯 所持している物やついてい地位。所領。知行。官職。財産。

安堵 中世、武士や寺社の領地の所有権を公認すること。また、その公認の証書。

廊 廊下。建物と建物を結ぶ屋根のある建物。また、寺院の回廊。

敷皮 毛皮製の敷物。武家が胡床・床几などの腰掛の上や地上に敷く毛皮。

敷を敷皮の上のをきて 百度参りの際、石などを置いて回数を数える。本尊の前の廊に敷皮を敷いておき、百度参りで来るたびにそこに石か何かを一つ置き、参詣した回数を数える目印としたのである。

周匝 まわりをまわること。

結願 日数を定めて行ふ法会や修法を終えること。

仏餉 仏に供える米飯。

仏供田 仏前に供える米飯のための田。

夏衆 僧侶。夏安居に参加する僧衆。

上分 上等の部分。最上の部分。

(版本…中巻第六話「飯飼平次本領安堵の事」)

第三卷

一 和州前吏俊平地藏利生事 建久年中

【本文】

後鳥羽院御宇*建久年中の比、和州前吏*平朝臣俊平〔号三重左衛門〕、偏に当寺の地藏を信じ、常に参詣の心ざしをはこびけり。

其中に一千日の間*通夜の大願を発して、二心なく信じたてまつり、風雨をいとはず寒熱をさらふ事なく、*二世所求、悉不成者、不取正覚の本誓をたのみて、既に一千夜の参籠を満しけり。その夜の夢に御帳の内より墨染の衣めしたる御僧の布袋をもちて出給て、白米をとり出し通夜の人々にたび給けり。しかれども、左衛門尉俊平にはたまはらざるあひだ、御僧に問申ければ、今一千日まいりたらん時、汝には大福をあたふべしと仰られて御帳の内へ入給へり。地藏御前に通夜したる諸人、みなうつ、にぞ見たてまつりける。そ

の時、俊平おもふ様は、吾前世に結縁のうすき故にてこそあるらめとて、*本願経の文を心にかべらる。*吾業道の衆生の布施の度量を觀するに、軽有重有は一生に福を受事あり。又十生に福を受る事あり。百生千生に大福利を受事ありといへる仏語、さてはたのみありと思ひて、いま一千日まいるべしとて怠なく歩を運びければ、二千夜と申夜の夢に、また墨染衣の御僧、御帳の内より出させ給ひて、白米の布とおほしきを俊平に賜とみておどろきぬ。

さて急ぎ家にかへり憑み居ける処に、関東より御尋あるべき事ありとて、軍兵ども来て引率してくだりぬ。俊平心のうちにおもひけるは、地藏の利生はなくして、かゝる不思議の事こそなけれど、人々もあさみあへりと。

かくして鎌倉に着たまひければ、色々の評議ありて、既に誅罰せらるべきに定ぬ。

其夜、頼朝大将の御夢に、墨染の衣めしたる御僧、錫杖もち給ひて枕の上に立ながら、京よりは是に召置られ候武士俊平は、年来の吾等が*檀那にて候。ゆるしてたびたまへとうつ、に御覽じける間、色々に思案評議ある処に、又次の夜かさねて夢想に、先の夜申て候俊平男をば許てたび候はぬやらんと高声に仰られける時、大将殿いづくよりいかなる御僧にて御わたり候やと問たまひければ、吾は京都五条坊門壬生辺に住する也。其男に御尋あるべしとてうちうせぬ。

さて翌日に俊平を召出して御尋ありければ、事の子細を一々にぞ申されける。我幼少より取分三宝に帰依する事もさぶらはず。又殊る善根をも修せず候。只先祖の信仏なるゆへに一心に地藏菩薩を信じ奉て、今世も後世も偏に此尊の悲願を念じ、二千夜の歩をはこび、随分祈念申候へば、御利生は候はず。剩無実の讒言を蒙り、これまでめされ候上は、前業の*所感と存置候あひだ、一身の事はおもひさだめ候。いまは唯來世の善処を地藏に任せ奉るより外は余念なく候と申されければ、頼朝を始たてまつりて数千人の侍ども、道理に伏して、さては此人は故なき事に是まで下給、痛しやとて袖を淋ぬ者はなかりけり。大將殿も感涙を催、さては夢中の御僧は地藏にてをしますにや。よき*方人をもてり。いか様の謀叛の科ありとも、汝をば許べしとの給へば、鎌倉中の人々誠に有がたき利生かなと褒美ければ、上下万民地藏菩薩をぞ信じける。

其後、本領以下の事、御尋あり。*豊後国三重庄は名字の地、其外諸国の領知ありのま、安堵の下知をなされ、*佐渡守に任じ馬鞍武器等を経て京都にのぼり面目を施す事、壬生の地藏の利生なりと天下に風聞しける。信心をはこびけるにや、富財充滿して御堂を大に建立し、末世に大法会を行じて一切衆生に値遇結縁の大願を成ぜしめむ。その懇志あさからざる物をや。

【語釈】

建久年中 一一九〇～一一九九。

平朝臣俊平 『尊卑分脈』には、三重流平氏として平俊平の名がある（山城守従五位下）。湯山学氏によれば、幕府の引付奉行人であったという（ある伊勢平氏の末裔―鎌倉幕府奉行人・三重政平の周辺―『湯山学中世史論集六 相模国の中世史』（岩田書院、二〇一三年））。

通夜 寺などに参籠して、終夜祈願すること。徹夜で読経・念仏などすること。

二世所求、悉不成者、不取正覚 『延命地藏菩薩經』に、「二世所求悉不成者 不取正覚」とある。衆生をすべて成仏させるといふ地藏尊の願。

本願經 『地藏菩薩本願經』。

吾業道のく受事ありといへる仏語 『地藏菩薩本願經』に、「我觀業道衆生 校量布施有輕有重 有一生受福有十生受福 有百生千生受大福利者」とある。衆生には、布施の輕重によつて一生で福を受ける者もあれば十生で福を受ける者もおり、また百生千生で大福利を受ける者もいる意。

檀那 僧に帰依し衣・食・住に関する物資を施入したり、寺の経営を支えたりする人。

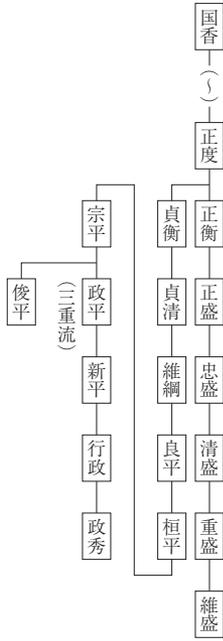
所感 前世での行為が、その結果としてもたらすもの。
方人 味方。仲間。

豊後国三重庄 湯山学氏は、豊後国大野郡内の三重郷という（湯山前掲論文）。

佐渡守 『尊卑分脈』では、俊平は山城守となっており、俊平の兄弟政平の孫行政が佐渡守であるという。

【補注】

本話・第三卷第二話・第四卷第一話・第五卷第二話・第六卷第二話に登場する俊平・行政・宗平・政平は、いずれも三重流平氏として『尊卑分脈』に名がみえる。当該部分を抜粋した系図は以下の通り。



（版本・中巻第七話「和州前吏俊平二千日詣豊饒を得る事」
本話は、『地藏菩薩靈驗記』第十四卷第一話に同話がある。

〈資料紹介〉「壬生地蔵縁起絵巻」注釈（二）

一 地藏菩薩二銘太刀行政与給事 元久二年

【本文】

一条院の聖代寛弘二年の供養より土御門院御宇*元久二季の*宝曆にいたるまで二百余廻の*涼燠を送り、本尊の威光ますます貴、結縁の諸人利生いよくあらたなり。

しかるに頼朝の代、平家の子孫を誅罰せらるゝとき、*惟盛の末子に千代松丸とて、*比叡山無動寺に住す。既に平氏嫡孫なる故に北条四郎時政、擲取に聊見る子細ありとて養子に契約し、名乗を*行政と号してたすけをく。

其おりふし、*東坂本に合戦あり。則行政を大将とさだめて*発向する処に、*分取高名し、たちどころに運を開く。爰にいづ方ともしらず法師一人来て、二振の太刀を行政にあたへ給へり。是は平家重代の劔なり。此太刀を所持する者は怨敵忽に滅する間、いま汝に是を伝る也としめして行方をしらずなりぬ。其後、此法師夢中に現じていはく、我是地藏菩薩也。*汝先祖在々所々に堂舎を建立て、我形像を安置する功力に依て、おのづから此宝劔を伝りと慥に告給ふ。

夢さめて、そのかたちを图画して、建立の在所、*六地藏其外霊仏を尋に、ある時壬生の宝幢三昧寺の地藏参詣のおりふし、御帳のひまより御厨子の内を、がみ奉るに、夢中の法師に寸分もたがはざ

る間、奇異の思ひをなし、*渴仰肝に銘す。

則伽藍をたて、仏法を崇敬し、国土安全の得益をあふぎ、子孫繁栄の巨益をいのる所なり。

それ此太刀を打立る事、*久寿二年八月一日より百箇日の間、精進潔斎して伊勢太神宮に参籠せしめ、*両宮を勧請したてまつり、二銘二振両人して作る太刀也。此劍所持の輩はその凶敵自滅して、此国大和嶋の主たるべし。則後白河法皇の宝劍として一振をば治世となづけ、一振をば誠劍と号す。後白河院より二条院につたはりけれ。其後、後鳥羽院の御宇*寿永年中に、天地鳴動して此太刀飛行自在を得て雲中に入、辰巳の方に光をさしてとびさりて伊勢太神宮にまいると云々。

此宝劍の由来は、しかしながら当寺の地藏菩薩の変化として鎮護国家の方便、まことに*理世安楽の表相、これ希代の*勝事なる者哉。

〔絵〕

【語釈】

元久二季 一二〇五。

宝曆 素晴らしい時代のこと。また、天子・天皇の年齢。

涼燠 寒いことと暖かいこと。転じて、春秋。歳月。

惟盛の末子「頼朝の代」という記述から、「惟盛」は、平重盛の嫡男、平維盛のことであるとわかる。維盛には六代という名の男子がいたことが『平家物語』等により知られるが、千代松丸という子がいたことは確認できない。

比叡山無動寺 比叡山東塔無動寺谷にある、天台回峰修験の根本道場。

行政 平行政。三重流平氏。佐渡守。『尊卑分脈』では俊平の兄弟である政平の孫となっており、本話の維盛の子という設定とは異なる。他には、弘安七年(一二八四)「平行政願文」と、延元二年(一二三七)「平行政施行状」に名がみえる。ただし、本話の設定年代である元久二年(一二〇五)とは年代に差異があり、「平行政願文」「平行政施行状」は本話の現実性をただちに担保するものではない。

東坂本に合戦 不詳。

発向 目的地に向かつて出発すること。特に、軍勢をさし向ける時に用いることが多い。

分取高名 戦場で、敵の首に、所持品を添えて取ってくること。

汝先祖在々所々に堂舎を建立て、我形像を安置する功力「伯耆国大山寺縁起」では、大山寺の地藏尊に対し、平正盛が夢想を感じたこと・忠盛が金剛等身の地藏尊像を安置し、十輪経と大般若経を奉

納、田地を寄附したこと・清盛が大般若経六百軸を奉納したことがある。しかし、『平家物語』等には、清盛系の平氏が地藏尊を信仰

内容を伝える。

していた、あるいは堂舎を建立していたという話は確認できない。

〔付記〕 壬生寺貫主松浦俊海師、副住職松浦俊昭師には、格別のご配慮を賜りました。厚く御礼申し上げます。

六地藏 貞享元年（一六八四）刊十四卷本『地藏菩薩靈驗記』（実睿撰）では、平清盛が六体の地藏を造立したという。また、延宝四年（一六七六）・貞享二年（一六八五）序『日次紀事』（黒川道祐

等）には、小野篁が六地藏を造り、保元二年（一一五七）に平清盛が西光に命じて他所に移した、という記述がある。なお『源平盛衰記』に西光が六地藏を造立したことが記されているが、清盛の命であるとは述べられていない。

渴仰 仏を深く信じ仰ぐこと。

久寿二年 一一五五。

両宮 伊勢神宮の内宮と外宮。

寿永年中 一一八二～一一八四。

理世安楽 世を治め民を楽にすること。「理世」は世を治めること。

治世。「安楽」は苦痛がなく、心身穏やかで楽なこと。

勝事 大変すばらしい出来事。非常にすぐれたこと。

（版本・中巻第八話「平行政二銘の太刀を給はる事」）

本話は、「大和三位入道宗恕家乗」所収の説話が同話として知られている。また、壬生寺所蔵文書「二太刀壬生地蔵靈験」も同様の